

「懐かしの大夕張の風景」

刻々と風景を変化させてきた夕張の町。その中でも中心部から約 25km、市の東部、夕張川上流に位置する鹿島地区の変貌には、その歴史を知れば知るほど心を揺さぶられます。地元の人々は誇りとともに「大夕張」と呼んできたこの町は、1929 年に操業開始した三菱大夕張炭鉱を中心に栄え、最盛期には 2 万人超の人々が暮らしていました。しかし 1973 年の閉山、そして 1991 年のシューパロダム建設の決定とともに、徐々に人口は流出。1996～97 年にかけて全住民は移住、ついには 0 人になりました。



シューパロダムの工事が進む一方で、大夕張はしばらく「何もなくなった町」として、「そこにそのまま」ありました。建物は全てなくなっても、道路は当時のままでした。しかし移住から 14 年後の 2011 年秋、町の中心部を通過していた国道 452 号線は、拡張されるダム湖畔にそって付け替えられ、2013 年 8 月末をもって、旧国道への一般の立ち入りは禁止となりました。そして 2014 年の春、いよいよシューパロダムの完成にともなう試験湛水が始まります。実際にどこまで水が覆うかはわかりませんが、いよいよこの地域の「記憶の痕跡」は視界から消えることとなります。

夕張を訪ねるようになってから 7 年。大夕張は、私にとって、夕張市の各地区の中でも、とりわけ様々な思いが交錯する空間となっています。人口が減少し、町並みが寂しくなっていくさまは、どの地区でもある程度共通していますが、「全く人が住まない」風景が与えてくれるインパクトには、強烈なものがあります。今でもカーナビには鹿島明石町、千年町…といった町名が表れます。しかしそこには何もない。この「あるのに、ない」という状況に直面すると、人はある意味、愛する対象から無理やり「引き裂かれる」ような、心の傷が疼くような感覚を覚えます。

「懐かしむ」という感情は、そうした痛みを癒す免疫作用と考えることができます。何もなくなっても、そこを訪れることができる。車から降りて道を歩けば、そして微かでも痕跡を見出すことができれば、当時の風景を思い浮かべることができる。それだけでそこで暮らした人々にとっては、それぞれの人生の時間を意味のあったものとして受け止めることができます。しかし、それ以上のことはできません。大夕張のこの 16 年の存在の仕方は中途半端でした。「あるのに、ない」(土地があるのに、住めない)。この寸止め感覚のまま時間が過ぎるということは、「懐かしむ」ことによって癒された傷口を、再び刺激します。大夕張の町が、「そのまま」そこに放置されてつづけてきたという事実は、残酷です。

そして昨年、この町は「近寄れない」「見下ろすだけ」の対象になりました。そして次には水が入り「沈む」こととなります。でも…もしかすると水量によっては、湖底に沈まないかもしれない(かつて多くの人が住んだ鹿島の中心街は、ダム本体から遠く離れ、それなりに土地の高さもあります)——まるで真綿で首を絞められるような状態がこれからも続きます。

日本には、ダムに沈んだ町がたくさんあり、こうした思いは大夕張に限ったものではないとも言えます。もちろんダム建設という大事業が行われるのには、それ相応の理由があります(シューパロダムは、夕張川

下流地域の治水が主目的)。住み慣れた土地から離れる人は、その理由の社会的意義に即して、複雑な感情を自ら納得させるしかありません。2013年7月15日、シューパロダムの完成を期して「さよなら、大夕張ダム(シューパロダムの手前に1964年につくられたかつてのダム)感謝のつどい」が開かれました。そのイベントを訪れたかつての住民の方向何人かにお話を伺いましたが、口々にその「意義」を噛みしめるように言葉にされていたのが印象的でした。

これは単なる「ノスタルジー(郷愁)」の問題ではないと私は考えます。国とか社会とかといったマクロなパースペクティブは、生身の、一人ひとりの生活やところを大切にするという次元とどのようにしたら折り合いをつけていったらいいのでしょうか——個人と社会の間の矛盾。これは近代が抱え込んだ普遍的な問題です。そもそも石炭政策の変遷に翻弄された夕張の町の歴史それ自体が、この矛盾そのものの表れといえましょう。そしてそれは、この国のここに——深刻さの度合いは様々ではありますが——見ることができます。例えば、「あるのに、ない」という大夕張の風景を、放射能汚染で長期避難を余儀なくされている福島浜通りに重ねてみたらどうでしょう。「社会的意義」を口にして納得することが困難になった、かの地の人々の心中を、私はあれ以来、新しい国道から大夕張の町の全景を見下ろすたびに考えます。



国土地理院 1/50,000 地形図(昭和37.10)

私たちは、昨年从这个大夕張の写真、地図、映像を集め、かつてあった町の姿をそこからイメージしやすくなるように整理して見ていただけるように「アーカイブ化」するプロジェクト(大夕張アーカイブ・プロジェクト)を始めました。既に鹿島小学校や石炭博物館などに保存された写真約800枚をデジタルスキャンしました。これからその写真に何が映っているのか、それはいつどこから撮られたものなのかを確認し、地図の上にプロットし、相互にリンクして「風景」としてのイメージが立ち上がっていくようにしたいと考えています。

これまでの「ゆうばりアーカイブ」の上映会でも、映像に懐かしい風景が表れると、「ああ、あそこが〇〇だよ」「あ、△△さんだ」という声が会場のあちこちから上がります。そのことは「風景とは、単に眺めるだけの対象ではなく、人々の生きる営みそのものを支える認識環境である」ということを意味しています。すなわち風景を失うこととは、生きる意味そのものの喪失と言い換えることもできましょう。意味が見失われれば、人は言葉をなくし、コミュニケーション(会話)も途絶えます。その沈黙は、人と人との絆も蝕んでしまいます。映像には、その大切な風景の喪失を補てんする役割があると、私は考えています。

今回上映する大夕張の映像の中には、小学校の子どもたちや、この町に暮らしていた人々の生き生きとした表情が記録されています。そのことは「町とは地図上に区切られた土地のことではない。そこに暮らす人がいて、はじめて町になる」という、いたって当たり前のことを思い出させてくれます。みなさんにも、この「大夕張」の映像から、全国の、さまざまな町と人々のくらしのことに、思いを馳せていただくことができれば幸いです(2014年2月28日)。